

「ケアの質」対「生活の質 (QOL)」実践論

障害児・者の医療・保健・福祉・教育の実践は、ノーマリゼーション理念の浸透にあわせて利用者中心のものとなってきた。とはいいながら、専門的な治療・教育・支援の質（「ケアの質」）を確保した上での「生活の質 (QOL)」の向上でなければならない。国際的動向とともに現場実践の成果と方向性を紹介する。

障害福祉制度の動向

障害福祉制度は平成 15 年に措置制度から支援費制度に転換し、18 年の「障害者自立支援法」の施行により支援機能に着目した施設体系に移行し、定率負担になった。24 年度からは応能負担に戻り、障害児施設体系も見直された。25 年度からは自立支援法が「障害者総合支援法」に引き継がれ、法施行 3 年後の見直し法が昨年成立し、30 年度からされる。そうした制度改正の流れと今後の展望について学ぶ。

行動（習慣）のしくみと障害

ヒトは生活の中で、さまざまな行動をしている。生まれてから後に環境とのかかわりで、行動習慣を獲得し、環境に働きかけまた適応しながら生きていく。こうした行動のしくみを学習心理学、行動心理学の成果を紹介しつつ、障害との関係について考える。

障害と精神医学の基礎知識

障害児（者）は、時に行動障害を引き起こすことがあり、その場合には精神科薬物療法を受ける必要が生じる。さらに、行動障害の背景にさまざまな精神科疾患が関連していることもある。

そこで、発達障害への理解を深め、適切な支援を実践するために、精神医学を体系的に学ぶ。

発達障害の診断と援助

総論として発達障害とは何か説明し、各論としてそれぞれの発達障害の診断・支援について医学的視点を中心に話す。

行動とその評価法

発達障害児・者の支援を行う上で、対象者の理解と様々な心理社会的課題の理解が欠かせない。本講義ではまず、その理解のためのアセスメントの意義と方法について概要を学び、これらを概説できるようになることを目標とする。

後半では、日常生活や活動場面の観察に基づいたアセスメントである課題分析について学ぶ。身辺自立、家事、余暇、地域生活での買い物や交通機関の利用といった様々な活動の支援に際し、課題分析の手法を活用できるようになることを目標とする。

脳のメカニズムと障害

障害福祉の領域には、知的障害、運動障害、行動異常、てんかんなど、脳が関与する病状が多い。その背景にある脳の構造とその機能（脳の各部位がどのような役割を有するか）、脳の発生と小児の精神運動発達、およびそれらの障害の概要を解説する。

発達障害の歴史と今日的課題

自閉症を世界で初めて報告したのは、1943年、アメリカの小児精神科医カナー、Lであった。1960年代に入り、イギリス・ロンドンのモズレー病院の小児精神科医であったラター、Mと、彼をリーダーとする「モズレー学派」と呼ばれる研究者から異論が出て、1980年代からは、子どもが他者の認識や感情をどのように理解するようになるかという「心の理論」研究が世界的に活発に行われ、広汎性発達障害という概念から自閉スペクトラム症という概念へと変わってきている。ここでは総論として、発達障害を巡る歴史を振り返り、今日的課題について論じる。

自閉スペクトラム症への発達論的アプローチの新動向 ～情動の発達と情動調整支援～

DSM-Vにおいて自閉スペクトラム症(ASD)の診断基準の筆頭にsocial-emotional reciprocityが入り、そのアセスメントと支援が重要な課題になっているが、わが国で情動発達や情動調整のアセスメントの観点や方法において必ずしも合意が出来ているわけでない。そこで本講座では、最近の情動発達、情動調整の研究の動向を中心に論じる。

心理アセスメント(知能検査・WPPSI-WISC-IV)

小・中学生を対象に一般的に広く使われているWISC知能検査について紹介し、検査の概要や結果の読みとり方、発達障害(特に広汎性発達障害)に見られる検査結果の特徴について、事例を交えながら考えていく。また、WISCの幼児版であるWPPSIについても簡単に紹介する。

心理アセスメント(田中ビネー知能検査V・新版K式発達検査2001)

個別式知能検査である田中ビネー知能検査Vと新版K式発達検査2001の概論を説明する。また、検査を通じて子どもの発達を考えていく。

心理アセスメント(PEP心理教育プロフィール)

自閉スペクトラムの評価、療育のため作成されたPEP-3を取り上げ、その概要を説明する。

広汎性発達障害PDDから自閉スペクトラム症ASDへ

DSM-IIIからDSM-IVまでは、生得的・先天的な脳の成熟障害によって発生する広汎な領域に及ぶ発達上の問題や障害を『広汎性発達障害(PDD:Pervasive Developmental Disorder)』という概念で現してきた。DSM-Vではこの広汎性発達障害(PDD)という概念の使用をやめて、『自閉スペクトラム症(ASD:Autism Spectrum Disorder)』という自閉性の連続体(スペクトラム)を仮定した診断名が用いられることとなった。この経緯について、その概要を述べる。

自閉スペクトラム症ASDの障害特性

アメリカ精神医学会から出版されているDSM(精神障害の診断と統計マニュアル)が2013年5月にDSM-4-TRからDSM-5へと改訂され、これまで「自閉症」「アスペルガー症候群」「広汎性発達障害」とその症状の現れ方によって別々に分類されていた診断名が「自閉症スペクトラム障害」に統一された。本講義では、診断名が変わった背景について整理を行うとともに、「自閉症スペクトラム障害」の適切な理解を深める。なお、DSM-5では「Autism Spectrum Disorder(自閉症スペクトラム障害(ASD))」となっているが、日本国内においては日本精神神経学会が「自閉スペクトラム症」という用語を正式な診断名として用いている。

不登校の今日的意義と子どもたちへの支援

不登校問題の歴史と対応・対策の検証について学ぶ。

LD(学習障害)への理解と支援

学習障害とそれに隣接する各種の障害との差異を考察しながら、学習障害の実際的なタイプの見分け方と具体的な指導方法を学ぶ。

発達障害のある人たちへの支援技法「構造化」

発達障害（自閉症スペクトラム障害を中核とする）のある人は、自分の置かれた環境や周囲から求められていることの意味を理解しにくい。構造化とは、その人が「一人でわかる、できる」ことを増やすための支援ツールである。

本講義では、発達障害の特性からくる生活上の困難さに触れながら、それらに対する構造化のアイデアを紹介する。また参加者同士で、お互いの現場の課題や工夫について意見交換をする。

地域で暮らす気になる家族と療育ネグレクトへの支援

医療型障害児入所施設に措置入所している児童の多くは、保護者に何らかの医学的な課題を持つ。これらの児童が地域で家族と一緒に暮らしていく為には、本人だけでなく保護者の支援も必要となる。今後、地域で暮らすためにどのような支援が必要なのかその策を探る。

行動障害の理論と実践

厚生労働省の平成 25 年度新規施策として「強度行動障害支援者養成研修」が実施されることになった。行動障害という言葉は行政用語であり、発達障害も診断名ではない。昨今、行動障害について、岡山県においても平成 27 年度から「岡山県強度行動障害支援者養成研修」が行われることとなった。そこで、行動障害の定義とその考え方を理解することが必要である。

本講義では、障害福祉サービス事業所や施設で、行動障害が著しい人の行動の背景にある障害特性を理解するとともに、実践を踏まえた内容で行動障害の実際について紹介する。

発達障害児・者が示す行動障害への理解と支援

発達障害児・者の中には、自傷行為や他害行為、強いこだわりなど、行動上の問題を示す人々がいる。これらの行動は行動障害と呼ばれる。この講義では、行動障害の内容やその背景にある要因などについて概観し、行動障害に関する理解を深める。また、学習理論や応用行動分析などに言及し、行動障害への治療教育的なアプローチについても理解を深める。

ADHD（注意欠陥多動症）の障害特性（1）

DSM-Vにより、発達障害の概念や種類も変化した。特に、自閉スペクトラム症 ASD と注意欠陥多動性障害 ADHD である。最近、各方面から急激に研究が進み、ADHD に関する新しい学説が出てきている。こうした新たな動向を踏まえて、ADHD の障害特性について論じる。

ADHD（注意欠陥多動症）の支援技法（2）

注意欠陥多動性障害 ADHD の心理機能的な障害特性として、2つの基本症状である実行（遂行）機能の障害、報酬系回路機能の障害に起因する問題解決スキルの弱さや衝動性の問題が指摘されている、そういった行動に出やすい ADHD 児者への望ましい支援のあり方について論じる。

発達障害がある人が抱く「困り感」への理解と支援

本講義では、発達障害の人たちが感じることの多い「困り感」について、いくつかの疑似体験を通して、私たちと発達障害の人たちとの物事の理解の仕方や感じ方、捉え方等の違いを考える。彼らを感じることの多い「困り感」を体疑似験することにより、適切な理解と支援のあり方を考える。

発達障害と児童虐待

虐待の発生要因には、保護者要因と子ども要因があるとの説がある。それぞれについて理解することで有効な支援につなげたい。

障害児の福祉サービスについて

児童福祉法における障害児通所支援（児童発達支援・医療型児童発達支援・放課後等デイサービス・保育所等訪問支援）および障害児入所支援（福祉型・医療型）等の解説をし、障害児支援利用計画の具体的な事例を通して、障害児が利用できる福祉サービスの理解を図る。また、障害者総合支援法における障害児が利用できる福祉サービスについても解説を行う。

発達障害のある成人への合理的配慮

障害のある人が社会生活を送る上で、いろいろなバリア（社会的障壁）がある。そのバリアを取り除くものが「合理的配慮」である。発達障害のある人の場合、外見ではその特性が分かりにくく個性が高いため、本人との話し合いを通して（建設的対話）、一人一人の特性を知り、ニーズに合った配慮を可能な範囲で行うことが望まれる。

本講義では、県内の労働・福祉・教育の支援機関と、発達障害のある人を雇用している企業の両者を対象に実施した調査や、県庁における職場研修事業等の取組にも触れながら、発達障害のある成人への合理的配慮について考える機会としたい。

発達障害のある人への多職種による連携支援に向けて

発達障がいのある方への多職種による支援連携の事例を通し、①各支援部署・機関、②連携状況を学んでいただく。併せて、事例への個別対応から派生した地域圏域での新たな取組み支援を紹介する。

発達障害の心の発達とその支援法 ～『接面』パラダイムの認知論を踏まえて～

他者の認識や感情をいかに捉えるのかという「心の理論」研究が世界的に活発に行われ、社会的認知、コミュニケーション、言語発達などの研究に重要な影響を与えている。本講座では、「接面」パラダイムの認知論を踏まえて、発達障害の心の発達とその支援のあり方を論じる。

高機能自閉症をあわせもつ人たちへの理解と支援

高機能自閉症と言われる、言葉で自らの体験や生きにくさ、障害の特性について話をするのできる自閉症の当事者がいる。彼らが語る様々な言葉からは、私たちと自閉症の人たちとの物事の理解の仕方や感じ方、捉え方の違いを考えることができる。本講義では、自閉症当事者の語る言葉の中に見え隠れする自閉症の障害特性を探りながら、高機能自閉症をあわせもつ人たちへの理解と支援について考える。

心の理論障害の背景にある「語用性言語障害」とは

1980年代から、子どもが他者の認識や感情をどのように理解するようになるかという「心の理論」研究が世界的に活発に行われ、社会的認知、コミュニケーション、言語発達などの研究に重要な影響を与えており、子どもの理解の上には、不可欠な事柄と考えられるようになってきた。本講義では、ことばの発達という始点から、カナー以降の「語用論の障害」にふれ、心の理論障害のある背景にあるとされる「語用性言語障害」について、ドロシー・ビショップ（2000年）のモデルを中心に、社会的相互作用の障害がどうして弱いのを述べる。

ことばの発達と療育の実際

旭川児童院での、幼児期の言語聴覚療法の実際について（評価・目標設定・療育方法・使用教材・家族支援等）紹介する。

発達障害がある人への作業療法的支援

- ・子どもの発達、障害の特性を学び支援に役立てる。
- ・家族支援のあり方を考える。

発達障害と就労支援

発達障害のある方の就労・定着支援における課題を明らかにするためには、関係機関の連携はもとより、福祉的就労事業所や職場における支援の基本的な考え方や職場適応のための支援を具体的に理解することが必要となる。当事者の障害特性を踏まえ、必要な就労支援、準備支援のあり方を考える機会としたい。

発達障害のある子どもたちの情緒的特性と支援法

軽度発達障害のある子どもたちの情緒的問題と、その発生メカニズムの基礎を学んでもらう。そのうえで、情緒障害児短期治療施設・津島児童学院での支援実践から、この問題に対する支援の実際を学んでもらう。

発達障害のある人の支援を考える情報連携とチーム支援の大切さ

障害者総合支援法はノーマライゼーションの理念に基づき、障害のある人が普通に暮らせる地域づくりを目指している。この理念を実現するためには、地域における様々な関係者による連携やネットワークを構築することが重要となる。

障害がある方の地域生活を支援するためには、複数のサービスを適切に結びつけて調整するとともに、社会資源の改善・開発を行う必要がある。

相談支援専門員が行うケアマネジメントの手法と事例を解説し、チーム支援および情報連携の実際について述べる（発達障害がある人の事例を使用）。

発達障害のある人の家族への支援の実際

発達障害支援においては、本人支援だけでなく、本人に関わる人への支援も必要となる。特に、発達障害児を育てる家族を中心とした支援を考えることは、本人を中心とした支援と共に考えていくことが大切である。

本講義では、家族支援のニーズを共有し、そのニーズに合わせた家族支援の方法を、おかやま発達障害者支援センターの取組みから紹介する。

発達障害の息子との日々

自閉症スペクトラムの息子を育てていく過程で、私自身が様々な事を感じ、気づき、そして息子に育てられました。今私が息子との暮らしを通して、思っていることをお話ししたいと思います。また、親の会を作ったいきさつや、その後の様々な活動に発展していった様子などを、お話ししたいと思います。

主体的に行動するために必要なツールの工夫

「達成感」を育てる条件には、主体的に行動する、分かって動ける関わりの工夫、自ら使えるツールを工夫することなどがあげられる。そのためには、目的の理解、誤りへの気づき、遂行能力、修正能力、感情の調整などの能力開発が必要となる。本講座では、支援者が発達障害がある人へ自ら使える支援ツールをいかに工夫するかを論じる。

不適応行動の分析法とその実演

ここでいう不適応行動の分析とは、不適応行動が環境に及ぼす影響、すなわち、その不適応行動が生じることによって、その結果、どのようなことが起き、そのことが不適応行動を起こした本人にどのような効果をもつのかという、結果や効果を分析することを指す。こうした分析によって、その不適応行動を強め、維持している要因を明らかにすることができることを実際にアセスメントして、数量化できることを学ぶ。

発達障害児への支援の実際（幼児期編）

幼稚園・認定こども園での保育と療育の関係について、事例をもとに援助のあり方や、保護者との連携のあり方を考える。さらに、特別でない特別支援教育、クラス・集団作りについて述べる。

発達障害児への支援の実際（思春期編）

思春期を迎えた子どもたちの中には、精神的に不安定であったり、イライラしたりするものである。その中で、発達障害を抱える子どもたちは、小学校から中学校へと環境の変化と格闘しながら、自分の進路を考えていく時期を迎える。中学校は義務教育の最終段階であり、卒業後の進路は生徒や保護者にとって最大の関心事となる。発達障害をかかえている生徒の進路選択や通常学級で生活する生徒の事例報告を中心に今日の進路選択の現状を考えていく。また、小学校との連携や、進路先との連携について考えながら、発達障害をかかえる子どもたちへの継続的な支援方法について考えていきたい。

幼児期の個別支援プログラム作りの意味と実際

「個別プログラム」作りは、一人ひとりの子どもの発達を支援するために欠かせない。支援者は、子どもの日々の療育や保育にあたり、計画を立案するが、「個別プログラム」とはこうした療育計画、保育生活のことを表すものではありません。「個別プログラム」は活動計画の立案のための準備として、事前に個々の子ども達の発達状況を総合的に評価し、さらに期間を限定して、評価に基づく長期的、短期的支援を設定するものです。さらに一定期間を経過したのちには、設定した目標に対する進み具合を再評価し、新たな目標設定を行います。こうした初期評価と再評価（見直し作業）は定期的に行われるものであり、その都度「個別プログラム」の内容は書き換えられ、更新されるものでなければなりません。また、「個別プログラム」は、支援者が独自に保有するものではなく、家族に開示し、家族を始め子どもに関わる全ての支援者が、個々の発達状況や特性についての共通理解を持ち、一貫した支援をするために活かされるものです。講義の中では、「個別プログラム」作りのための準備、手順、活用の仕方について、我々の実践を紹介します。

発達障害のある子どもの「家族支援」の実際

障がい児の保護者がどのような気持ちで子育てをしているかを理解することが、保護者支援の必要性とその方法を理解することへの早道と考えます。今回の講義では、表面に現れにくい障がい児の保護者の心の葛藤に着目し、その部分への理解を深めることに重点を置きます。具体的には、保護者の気持ちの疑似体験やピアサポートの現場での事例に基づくワークにより、保護者の本当の気持ちに気づくための数々のヒントを解説します。

発達障害がある人のストレス耐性への望ましい支援のあり方

現代はストレス社会とも言われ、ストレスに関してさまざまな研究が進められてきた。こうしたストレスに適切に対処できず、人はさまざまな症状に襲われることも少なくない。特に、発達障害がある人たちにとって、対人関係や環境からくるストレスに適切な対処ができないことで「生きにくさ」を感じつつ、日々の暮らしの中に身をおく人もいる。本講座では、そうした発達障害がある人へ、我慢するという意味での「ストレス耐性」という側面から論じる。さらに受講者へ、ストレスの抜き方を紹介する。

脳の損傷と人間の行動 ～高次脳機能障害の特性理解～

後天的な脳損傷である高次脳機能障害を理解することは、発達障害者の理解と支援のための一助になると思われる。記憶・注意・遂行機能（企画・管理・判断の能力）・社会的行動の障害は日常生活にどのような影響を及ぼすのかを講師が実際に経験したエピソードを中心に講述する。

青年期・成人期の活動プログラムの意味と実際

発達障害（ここでは比較的重度の知的障害や自閉症を想定）をもつ青年期・成人期の方々の活動を支援する際の基本的留意点を示し、活動の内容や組み方の実例を示す。

演習（個別支援計画の作成）

発達障害児（者）への療育や支援には、対象者のアセスメント、ニーズの把握、そのニーズの充足のための具体的な方法の判断が求められる。これらの過程を経て、療育・支援の目標や内容を定めたものが個別支援計画であり、本講義では、受講者それぞれが関わる事例についての個別支援計画の作成過程を演習する。

思春期の発達障害児への関わりについて

発達障害児がむかえる思春期というライフステージを概観した後、支援の考え方を紹介する。事例を題材にしてどのように支援すれば良いかを考えてもらい、実践に役立つ技能を身につけてもらう機会とする。

青年・成人期の発達障害のある人の自己理解を促すために

青年・成人期のステージで、発達障害のある人が自分に合った進路選択していく上では、本人たちが自分のことを理解し、自身に必要な支援に気づくといった自己理解がポイントになります。この講義では、青年期・成人期における発達障害のある人が専門学校・大学などの学生生活や就職時に直面する困り事の状態を学ぶ。その上で、本人たちが自分に合った学生生活や働き方を考える上で、どのような自己理解が大切かを考える。また、自分に合った働き方を考えるための活動プログラムの具体的な内容についても説明をおこなう。

ASDとADHDが落ち着きのなさとして見える背景にある感覚器官の特殊性

発達障害がある人たちの中で、感覚の過敏性や逆に痛覚に対する鈍性があることが指摘されている。特にASDやADHDが示す視聴覚の刺激の取り込み方については、最近の研究から次々に新たな報告がみられている。本講座では、ASDがなぜ、敏速に目を動かすのか、耳押さえをするのかを含め、身体的な内部構造と行動との関係、そして時間に対する捉え方の特異性から、周囲の人から見て彼らが落ち着きのなさに見えてしまっているカラクリについて論じる。

発達障害がある人の1番の課題 ～「社会性」を伸ばすカギ～

コミュニケーションの基盤となる「自己理解と他者理解」の視点から、発達障害がある人を理解することも、これからの支援者の大きな課題とされる。その中心にある社会性の基盤にあるものには、心の理論障害、共感できない、コミュニケーションが苦手などとされている。特に情緒的交流も苦手とする背景には「メタ認知」がある。こうした社会性を伸ばすポイントについて論じる。

発達障害者が成人期を迎えるまでに準備すること

発達障害のある子ども達が将来自立した生活を送る為に準備しておく必要がある内容、特に「自己理解」の必要性について講義の中で学んでいく。

岡山県における発達障害者支援の現状と課題 ～おかやま発達障害者支援センターの取り組みから～

発達障害者支援は、ライフステージの切れ目なく、様々な環境でも提供され、発達障害のある人の自立と社会参加を応援するために、計画的に仕組み作りを進めていくことが必要である。

発達障害のある人に保健、子育て、教育、医療、福祉、労働など、様々な領域での支援が提供され、切れ目なく支援が引き継がれることが望まれる。そのために、私たち自身が、それぞれの立場で何ができるのかを考える機会とする。